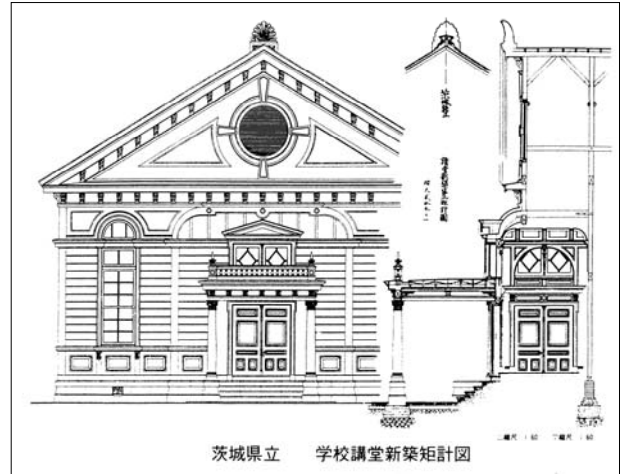




旧太田中学校講堂

左の写真は、本校旧本館と同時に国の重要文化財に指定された茨城県立太田一高の旧講堂です。設計者も同じ駒杵勤治。竣工したのも明治37年12月ということで、本校旧本館とは、双子のような関係の文化財です。この建物が重文に指定された経緯は、本校出身で建築史研究者一色史彦氏(高11回)による調査研究によるところが大きい。一色氏は昭和49年9月、駒杵氏の設計類例調査のため、龍ヶ崎一高を訪れ、取り壊し寸前の旧本館階段下の物置に保管されていた講堂の設計図に出会った。この設計図には「茨城県立 学校講堂新築設計図」とあり、実際に、この空欄に校名を入れ、4校の講堂がほぼ同時に建設されたことがわかったのです。

講堂設計図



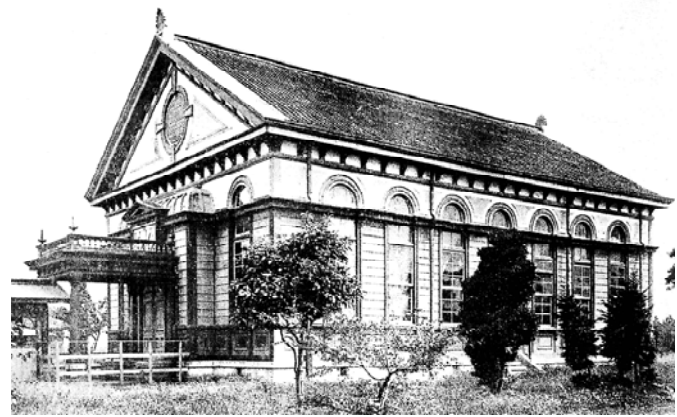
茨城県立 学校講堂新築設計図

四つ子のハイカラ講堂

龍ヶ崎一高に保管されていた一つの設計図(14枚)によつて建築された講堂は、旧太田中(現太田一高)・旧龍ヶ崎中(現龍ヶ崎一高)・旧水海道中(現水海道一高)、それに旧水戸高等女学校(現水戸二高)の4校の講堂であった。水戸女学校の講堂は大正7年の水戸の大火によつて焼失してしまい、龍ヶ崎一高及び水海道一高の講堂は老朽化と新しい施設建設のため、昭和40年代に取り壊されてしまい、現存しているのは太田一高の旧講堂のみである。

それにしても県の文化財保護審議会委員でもあった一色史彦氏の業績は大きい。

彼は昭和49年8月、土浦一高本館の正面玄関屋根裏の小屋束に釘打ちされた一枚の棟札を発見し、設計者駒杵勤治の存在を明らかにした。さらには同年9月に龍ヶ崎一高に保管されていた設計図を調査することで、これら建築物の文化的価値を確認した。これで土浦一高旧本館と太田一高旧講堂の、旧制中学校校舎としては全国初の国重文指定が決定的なものになったのである。因みに本校旧本館の棟札には、



旧水海道中学校講堂

表上棟式 大棟梁茨城県技師工学士駒杵勤治
裏明治卅七年七月五日 請負人石井権蔵

とあり、発見者の一色氏は明治の茨城に開花した駒杵勤治(『常総の歴史』第22号)で、一般に建造物の文化財指定で棟札という資料は重要なものであり、とくに旧本館の棟札は建築史の世界では第一級の資料であるとして、昭和51年2月3日、本館と共に文化財に指定されたのだと述べている。【この棟札は旧本館校長室に展示してある】

太田一高旧講堂の重要文化財としての指定理由を、文化庁の調査によると、「明治時代の洋風建築としての重要な遺例であり、損傷も少なく堂々としている。これは設計者と請負師の技術と心が合致していたことと、特に御影石の質と工法のすばらしさに起因する。」としている。また、「思い出がいっぱい詰まった旧講堂は、今なお威風堂々と母校の北側に残っている。百年を超える太田中、太田一高の歴史をじっと見続けてきたに違いない。『益習の百年』(太田一高百年史)と記しており、母校のモニュメントとしてその役割を果たし続けている。」

現水海道一高セミナーハウス(亀陵会館)



リニューアルされた講堂

水海道一高は創立百周年を迎え、記念事業として「済美会館の整備」などを掲げ、募金活動を開始したが、県費負担によりセミナーハウスが建設されることになったため、記念事業は「セミナーハウス設備整備」に変更された。『済美百年』(水海道一高百年史)には、「このセミナーハウスの基本設計図が同窓会役員会で初めて公開された時、思い出深い旧講堂の外観を模した設計は好評で、出席者の間からは口々に『ああ懐かしい。昔の講堂によく似ている。これはいい』との声が上がった。」と記されている。

旧太田中の講堂と同じ設計で同じ時期に竣工した旧水海道中の講堂は、昭和48年に老朽化のため取り壊された。講堂内部の部材の一部や玄関車寄せの柱頭飾りなどが保存されているものの、この時点で旧制水海道中時代を物語る建物類は全て姿を消したのである。それだけに、平成12年に、外観を旧講堂に模したセミナーハウス(亀陵会館)の完成は同校卒業生たちにとって往時を偲ぶ拠り所となった。